

アマダイ通信NO. 122

(Tile fish network letter)

2018年 元旦

知人・友人各位

スペインのカタルーニャ州の独立問題。革命とは権力の問題であり、権力とは究極、暴力の問題だとあらためて確認。豊かな州が稼いだ富を貧しい州のために使われるのは嫌だ！というのは、トランプのアメリカファースト！と同じ、格差を拡大、国民、世界の分断につながる。翻って日本。極右の晋三が権力維持のため、真ん中より左までウイングを広げ、リベラルのお株を奪う「国家社会主義」政策。新しい年は、議会で多数を占めたその行き着く先を見極め、暴走する北朝鮮の問題も解決、平和で豊かに統合された国民と世界の実現に一歩近づく一年でありたい。

◎師走🐟も走る

師走最初の週末、2日の土曜日は三鷹の寮で毎年恒例の「三鷹市民と東大三鷹宿舎生」の交流の集い。ドイツ文学専攻の女性教授による、画家志望、天文学をはじめ自然科学に造詣が深く、ワイマール公国の宰相を務めた法律家、行政官でもあり、何よりも「若きヴェルテルの悩み」や「ファースト」の名作で知られる作家、詩人の、天文学者としての側面からみたゲーテについての講演を面白く聴く。2部の懇親会、ただ酒飲める筈がただ茶で乾杯。駒場の同好会のコンパで酒を一気飲み、急性アルコール中毒で学生が亡くなり、裁判沙汰になって以来寮の公式行事ではアルコール禁止。それでも寮生、駒場の先生、三鷹の皆さんと楽しく交流。寮生と酒付の新年会の相談も。

その足で本郷に。夕方、チャンコ屋浅瀬川の2階の座敷で、学内アルバイト団体「東大学力増進会」の「同窓会」。戦後間もなく結成、「東北大進学会」や「北大進学会」など類似の団体が各地に作られ、株式会社化、公開会社として今に至る団体もある。中学生対象に都内で模擬試験や講習会を開催、教材作成や講師募集、研修等をする教科毎5名の審議員になると結構な収入。その上の3人の執行部に入ると並のサラリーマンより高給。高校生対象の同じようなアルバイト団体「東大文化指導会」は学内で講習会や模擬試験、通信添削（Z会と双璧だった）。学外の私立高校を借りて事業をしていた学増は東大闘争の影響が少かったが、学内で事業をしていた文指は東大全共闘による全学封鎖で事業を継続出来ず、解散。安田講堂の砦が落城、学生運動も下火になると、学増には東大全共闘の敗残兵が集まり、研究室に戻って学者になったり、研究室に戻れない者が医学部に入り直したり、起業したり、作家や弁護士、会計士、弁理士になったりするための一時避難所、孵卵器となった。医者や弁護士からは民主党の結党に参画、政治家になる者もいた。

翌日曜日も銀杏の黄葉が綺麗な駒場の、一高同窓会館跡のレストラン兼集会所で、Eクラス（第2外国語が中国語）の同窓会。85才が最長老、一番若手が🐟より1年下、昭和42年入学の吉野東洋大名誉教授。50名ほどが集い、在りし日を偲び、近況を語り合う。語学のクラスとしては小数派で異色の人材を輩出、駒場の学生自治会の委員長も多く出す。警察や検察の幹部も多い。2年目の一年生の時の同級生の奥村君が警視總監、その後の矢代、伊藤と三代の警視總監が落第一直線の🐟の同級生。追う警察と追われる全共闘が机を並べ、今や民青と三派が共に幹事で同窓会。人生も残すところ僅かでの呉越同舟の大団円。

前日金曜日の夕方、神田の学士会館で135回目の三鷹クラブの講演会。通産省OBで、商社の双日元副社長、冠婚葬祭互助会保証の社長をした、寮で1年上、(株)冠婚葬祭総合研究所藤島社長の「エンディング産業と終活の今」の講演を40名ほどで面白く聴く。いつもの神保町の中国料理屋三幸園で二次会。プールでの水泳も図書館での経済誌もままならず、週末も飲んでばかりでは、週明け4日(月)の診察で血糖値が上がるのも仕方ない。山あり、谷ありの人生も何時かは終わる。多少は他人の役に立ち、今少し余生を楽しみたい。

◎薬やりますか？酒やめますか？

日本人は高血圧症が5千万人、高血糖症が2千万人と言われる。🐟もその例に漏れない。血圧の上が160を越え、大腸がんステージ3b(殆ど治癒する見込みなし)を手術、15年経過したお茶の水駅前の三楽病院でここ数年、三ヶ月に一回降圧剤を貰っている。4.6-6.2が基準範囲の糖尿病の指数ヘモグロビン(Hb)A1c、先月測った時が8.1。糖尿病です。一ヶ月後にもう一度計ってみて、変わらないようだったら薬を飲みましょうか？と女医さん。一ヶ月後の12月4日(月)あらためて検査。その間、積ん読だった書棚の「糖尿病は薬なしで治せる」(著者は1941年生、53才で糖尿病宣告され、食事と運動で治し、20年後も健康で活躍中の、渡邊国立がんセンター元疫学部長、角川新書)でにわか勉強。基準範囲4.6-6.2のHbA1cが先月8.1、今回は8.0、6月は7.3%。60-110mg/dlが基準範囲の血糖は先月が285、今回は225、6月は121。糖尿病の薬を飲まないといけない状態だが、血糖を下げる機能をする唯一のホルモン、インシュリンは十分に働いているという。膵臓でつくられるインシュリンが足りなくなって、エネルギー源のブドウ糖が細胞内に上手く取り込まれなくなったために起こる病気が糖尿病。余ったブドウ糖は肝臓で脂肪として蓄えられたり(脂肪肝)、腎臓から尿として排出され、糖尿を来す。

要は膵臓は正常に働いているが、食べ過ぎ、飲み過ぎで、日常生活や運動で使う以上に糖分を摂取し過ぎ、インシュリンで処理出来ない余分な糖分が血中に出て来ている。週末はカートに乗らず歩くゴルフやスキー、水泳、平日の営業では電車と徒歩。運動量は同年代の仲間に比べ多いが、必要以上に糖質を摂り過ぎ。そこで、インシュリンを補う薬ではなく、血中から糖分を速やかに排出して血糖値を下げるデベルザを飲みましょうかと、女医さん。一瞬頷くが、副作用はどうですか？と聞くと、「デベルザ錠20mgをお飲みになる患者さんへ」という冊子を渡される。①適切な水分補給を心がけ、②感染症に注意しましょう。③低血糖に注意して下さい。とある。①デベルザを飲むとトイレの回数や尿の量が増えたり、喉や口が渇きやすくなったり、いつもよりペットボトル1本程度(500ml)、水分を多目にとる必要があるという。水分多目はいいとして、トイレの回数が多すぎるのはあちこち出歩き人と会うのが仕事の営業マンは困る。②糖が尿と一緒に出るため尿路や陰部で菌が繁殖しやすくなり、膀胱炎などの尿路感染症や性器感染症になるリスクがある。③健康な人で70mg以上に保たれている血糖値が低くなると空腹感、あくび、イライラ、冷や汗、手の震えなどが現れ、50mg以下になるとひどい寒感、脱力、痙攣、更には低血糖性の昏睡が起きる。そうならない様に飴玉などを携帯、低血糖時には糖分を補う必要がある。血糖を減らすために薬を飲むのに、減りすぎに備えて飴玉を持ち歩くのは本末転倒ではないか？副作用のリスクも大きい。渋々降圧剤も飲んでいるが、こんな冊子を渡されたことはなかった。思い直し、取り敢えず服薬は断る。

高血糖状態が続くと、網膜症や腎症、心筋梗塞などの合併症を引き起こすリスクが高まる。まず食事と運動で肥満を解消、血糖値を落とすということになるが、生活習慣を変えるのは中々難しい。糖尿病薬で血糖値を下げようということになるが、高い状態で安定していた血糖値を急激に下げると網膜剥離や網膜症が生じやすい。薬を飲んでも、飲まなくても同じ結果が生じるリスク。要は食べ過ぎない、飲み過ぎないこと。飲みながら食べるのが悪いのだから、飲まなければいいと、少なくとも飲み過ぎなければいいとわかっているが、「分かっちゃいるけど止められない」。そんな自分が情けない。

「糖尿病は薬なしで治せる」を読み進める。渡邊先生によると、血管が硬くなったり、血流機能が衰える高齢者の場合、エネルギー源のブドウ糖を必要とする組織、特に脳に速やかに届けるには、血圧を高めたり、血糖を増やす必要がある。逆に血糖を増やさないとストレスが増すようでは、本末転倒。QOL（生活の質）を重視、ヘモグロビン A1c が7~8%でもよいという報告が増えている。又、1999年に血糖値126mg以上を糖尿病にすると基準が引き下げられた結果、日本の糖尿病予備軍と糖尿病患者が2000万人と劇的に増えた。126mgはアメリカ糖尿病学会の決定に倣ったのだが、日本人を含むモンゴロイドは、欧米人に比べ血糖値が上がりやすい遺伝子を持つので、妥当か疑わしいという。日本でもかつて男は15才で大人として認められ（元服）、女も15才頃には結婚、子供をつくり、30才で亡くなるのが普通。精々生き永らえても「人生僅か50年」。70才まで生きるのには「古来稀なり」だったが、今や70才まで生きるのは当たり前。日本人の平均寿命は80才を越え、動物としての人類の寿命を越えて生き永らえれば、生命の仕組みに様々な不都合が生じる。個々の現象に一喜一憂するのではなく、社会的動物、類的存在として、多少は他人の役にも立ち、自分の生き方を大事に、社会経済の発展と科学の進歩がもたらしてくれた「余生」を楽しみたい。取り敢えずインシュリンの働きが正常な内は、食べ過ぎ、飲み過ぎに注意、「人工の毒」には頼らず、親と白神の自然がくれたタフな臍臓に頑張っ

◎熊のプーさんと配所の月

ベトナム反戦闘争から東大闘争、更に全国の大学闘争へと波及、フランスの5月革命など、欧米の学生パワーとも連帯した、60年代後半の日本の学生運動。全学ストライキ中の本郷の正門に「造反有理！」「帝大解体！」の二枚看板が突然並び立つ。中国文化大革命が日本にも波及、60年安保闘争のブントの流れを汲む社会主義学生同盟 ML 派改め、マルクスレーニン主義者同盟が日本の毛沢東派として名乗りを上げる。戦後の秋田の寒村で経験した貧困と折からの経済の高度成長がもたらした格差、そして疎外の解決のために社会主義革命が必要だ！と大学に入ってようやく階級意識に目覚めた。しかし「社会主義先進国」ソ連や中国も生産手段が国有化されただけの、「国家独占資本主義」「官僚独裁国家」。そんな時、生産手段の国有化だけでは革命は終わらない！永続革命を！魂に触れる革命を！と、毛沢東が文化大革命を発動。一国で社会主義革命が成功しても、世界革命が成就、共産主義社会が成立するまで、永続的に革命は続き、それは人間の魂を変える革命でなければならない！と、天の啓示を聞いたかの如くだった。

あれから半世紀。文化大革命で下放、貧しい農村に派遣されて功績を上げ、名門精華大学へ入学、地方で実績を積み上げ出世の階梯を登った習近平が中国共産党のトップに。

「愛称(隠語)」は熊のプーさん。観光名所となった下放の地ではプーさんが暮らしたヤオトンが人気。6畳二間ほどの土間の一間が流しと竈の台所、一間に竈の熱を引いたオンドル。オンドルの上にむしろが敷かれ、食卓とベッドを兼ねる。竈には木の枝やトーモロコシの茎、牛糞やを燃やし暖を取り、オンドルの上に敷いた垢で黒光りする煎餅蒲団にくるまって夜の寒さをしのぐ。天井から裸電球が一個、赤く鈍く灯る。枯木に裸電線を巻きつけた屋外のアンテナで電波をキャッチ、小さな白黒テレビの画面がザーザーと悲鳴を上げる。庭に掘った四角い大きな穴に渡した長木に跨り用を足す。見上げるとジェット機の白い航跡。数千、数万年の間、空を飛ぶのは鳥や蝶だけだったが、今や人も空を飛ぶ。その時代に、変わらず地べたの穴の上で用を足す農民。夜は漆黒の空に月が輝く。仲麻呂も見た配所の月に、熊のプーさん何思う？

20年ほど前、92年に老小平が南巡講話を語り、「中国版高度成長」が始まって数年、寮同期、学生運動仲間の高見君に案内され●●が初めて訪れた「緑の地球ネットワーク」の植樹地山西省大同市の農村。少年●●がその貧しさに涙した戦後日本の東北の寒村でさえ、ここまで貧しくはなかった。更に遡ること20年以上前、プーさんの見た農村中国の貧しさは如何ばかりだったか？南巡講和以降、外資を導入、世界の工場として発展、市場の大きさを武器に急成長、世界に羽ばたく企業も多く、経済格差は広がる。数年前、大同の農村を久し振り訪れた時、以前はなかった黒塗りの車が一台、一人親方のダンプが一台、バラバラのワンカップで飲んだビールも、揃いのコップで飲み、料理も揃いの皿に取って食べた。確かにディーブチャイナの貧困地帯でも着実に生活が底上げ、改善、だからこそその共産党政権だが、拡大する格差をどうするか？文化大革命と下放から習近平は何を学んだのか？「共に豊かに！」は社会主義の要諦。「先富」から「共富」へ舵は切られるのか？

「癒しの楽園南インド紀行8日間」(I)

(‘17.9.16 ~ 23、クラブツーリズム)

① 長〜い一日

9月半ばというのに、すっかり涼しくなった東京から、亜熱帯、常夏の南インドの港町、チュエンナイ、旧名マドラスに。インド西海岸の商都、インド第2の都市、かつてのボンベイが今はムンバイと称される様に、屈辱的なイギリス植民地時代の呼び名をインド風に変えた。11時15分発エアインディア8時45分成田空港集合、添乗員なしの安いツアー。

出発の直前、南インドがフィールドの東大の東洋史の先生の、「インド・から」を面白く読み終え、南インドの歴史、文化、社会について学ぶ所が多かった。8世紀前後、灌漑(ダムで川を塞ぎ止め、水路で配水、最後は水消失、海まで辿りつかない)の発達による農業生産性の向上が南部王朝の繁栄とヒンズー教の隆盛をもたらす。ヒンズー教はミャンマーからカンボジア、タイ、ベトナム、インドネシアにまで広がり、王朝は滅んでも、未だ各地に濃い影。アンコールワットやポロブドールなどの寺院、各地の水上市やショーなど、共通の勧善懲悪や悲恋の物語劇で身近に触れられる。その後のゆっくりとした歩みがイギリスによる植民地支配と第二次大戦後の独立を経て、大きく変化。それでも変わらなかったものを含め、2000年代のシン政権に始まり、モジ政権で加速する経済解放政策が国民所得を増大させ、中間層を厚くし、消費を更に刺激する好循環。社会を大きく変えつつある。興味が募る。

続いて機内で「インド・ビジネスは南部から・・・知られざる南インドの魅力」(藤井真也、JETRO)を読み始める。JETRO 初代チェンナイ駐在所長による本書もこの間のインド、特に南インドの経済発展と日本経済の関係などを詳しく述べ、面白い。旅行をきっかけにその国、地域に対する興味を刺激され、集中して学べるのは嬉しい。

好奇心に翼のついた飛行機は、折から日本列島を縦断する勢いの台風 18 号のため少し遅れて離陸、台風を北に避け韓国を横切り、上海から大陸を横断するが、途中結構な揺れ。水平飛行に入ったところで、機内食のお昼。これが最後の和食。白身魚の煮魚と日本米、サラダその他をおつまみに、ビールショート缶 2 本と白ワインミニ瓶 1 本で、いい気分、昼寝。成田 11 時 15 分発、時差 3 時間半のデリーに 17 時着。20 時 45 分デリー発、23 時 35 分チェンナイ着予定。これだけで 27 時間だが、荷物受け取り、ホテルへの移動と宿泊手続き、シャワーと続く、長〜い一日。眠れるところで寝ておかないといけないが、寝過ぎるとお勉強も紀行文もはかどらない。気が付けば窓の外は濃紺。ここは雲の上、太陽が沈んだのだと思うが、窓にスモークをかけているだけだ。ボーイングの最新鋭機 787 は窓にブラインドがなく、スモークの濃淡で遮光を調節する。一斉にスモークを入れることで、昼寝を誘っている。だが、この調子で窓からブラインドがなくなったら、営業顧問先のブラインドの老舗、ニチベイの仕事がなくなる。旦那が傾けば、お妻さんはおまんまの食い上げだ。ANA と JAL の 787 にはウォシュレットまでついて快適だが、エアインディアの 787 にはウォシュレットは勿論なく、新型なのに早くもドアの立て付けが悪く、座席の折り畳みテーブルの蝶番が壊れ、水平にならない。載せた物が滑り落ちる。内装メーカーが悪いのか？メンテナンスの問題か？日本の最新の新幹線にはウォシュレットがついて爽やかお尻文化を楽しめるが、日本の援助でムンバイとアーメダバード間につくるインドの新幹線にはウォシュレットがつくのか？つくとして、メンテナンスが出来るのか？あのトイレの綺麗さを実現出来るだろうか？世界に冠たる清潔・快適な日本のトイレ文化が、航空機と新幹線を突破口に、世界に広がるのは素敵だ！

夕方、パンとマーガリン、菓子パン、サラダ、ヨーグルト、フルーツの 2 回目の軽い機内食。ビールをリクエストするが届かない。デリーで入国審査。10 年前に更新したパスポートを今回再更新。最初のスタンプはインドのビザとなったが、写真の再合成を業者に頼むなど手間取る。入国にも少し時間がかかる。パキスタンや中国など、隣国との深刻なトラブル、国内でも大きな格差と宗教対立を抱えるから神経質になるのか？要所に自動小銃を構えた警備兵。日本の平和に感謝。荷物受け取りは何番か？係員に聞くと日本便は 14 番だという。14 番で待っても荷物は来ない。あらためて聞くとエアインドは 8 番で、同時刻に JAL 便もあったらしい。8 番で寂しく待つスーツケースに謝り、ガイドと待つ総勢 17 人の仲間に合流、国内線乗場へ。搭乗手続後搭乗口まで結構歩く。途中インドのタタ自動車に買収されたジャガーの高級セダンだけでなく、マルチスズキの ZEXA ブランドの小型と中型セダンの展示。その横にも自動小銃の警備兵。搭乗口確認後解散。フードコートでハイネケンを売るバーを見つけて入ると同行の同世代？の夫婦も。ザックからツマミを取り出し酒盛。ガイドのチョーハンさんの言うように、お酒は高い。ビールは千円するというのが、532 ルピーに消費税(物によって 8~28%) 20%がついて 638 ルピー(1 ルピー 1 円 80 銭)。

国内線で思いがけず機内食。インドカレー第一弾は南インドらしく、長粒種の白いご飯をまん中に挟んだ赤い豆腐？のカレーと黄緑の豆のカレー、美味しい。一日に 4 食食べる。

成田を飛び立って16時間、ようやく雨のチェンナイ空港着、アンバサダーパーラホテルに旅装を解く。週末、土曜日のホテルのホール、大音量の音楽が流れ、若者達が賑やかにパーティ。バスタブはなく、シャワーを浴び、広いダブルベッドに一人で潜り込む。長〜い一日が終わる。

② 時節到来

二日目、ホテルでバイキングの朝食。辛いのが苦手でも、食べられないほど辛いものはない。玉子焼きのコーナー。どうにか意が通じて、裏返さず、レアな目玉焼きをゲット。生に近いなど少し不安になるが、余り細かい意志疎通は出来ない。美味しく食べる。デリーから一緒の現地ガイドのチョウハンさん、背が高く、スラッとして、肌がそんなに黒くない。チョウハンさんなど北はアーリア系で、東はモンゴル系、南は色が黒いタミール系が多いという。インドはヒンズー教徒が多く、イスラム、頭にターバンを巻いたシーク教徒などがいるが、南はキリスト教徒が比較的多いという。インド第4の都市チェンナイでも地下鉄の延伸、新設が盛んで、各所で工事中、渋滞に拍車をかけている。郊外の空港の先まで走る高架の鉄道も地下鉄だという。都心部は地下を走る。

鉄道発祥の国イギリスの植民地だったインド、その鉄道の歴史は日本より古い。国土は広いが人口も多く、間もなく16億人、人口増加の勢いの衰えた中国に替わって、世界一の人口大国になるという。都市内は地下鉄やモノレール、都市間は高速鉄道、大都市間は新幹線やリニアなどの超高速鉄道で結び、人と物の移動をスムーズにし、生産性を高め、国民の暮らしを豊かにするのを日本もお手伝い。少子高齢化で有り余る日本の製品や技術、資本を使って頂ければお互いハッピー。幹線道路の拡幅や高速道路の建設も進み、移動が大分スムーズになったというが、バイク、バイクに屋根をつけたタクシーのシクロ、自転車タクシーのリキシャ、自転車まで一緒に走る街中の道路はいつも大渋滞、そこに牛まで割り込んで来る。生産性を向上させ、所得を増やして、国民を豊かにするには交通インフラの整備が不可欠。日本のODAを利用、三井物産などがムンバイとデリー間の貨物鉄道の建設に着手。今又、JR東日本が中心になって、日本の技術と資金でインドに「新幹線」をつくるという。東海道新幹線に続いて上越や東北新幹線をつくる時、誰が乗るのか、狸や猪が乗るのか？空気を運ぶだけじゃないかという批判もあった。今では上越新幹線や東北新幹線でも、チケットを取るのに苦労する時がある。東海道新幹線に至ってはこれ以上列車を増やせないと、リニア新幹線の建設に着手、完成すれば現在最速ののぞみの客はリニアにシフト、停車駅の多いひかりやこだまの本数が増え、乗客の利便性が増す。

インドの地下鉄には日本の様に学生割引やシルバー割引、通勤割引はありません。先ず日本に借金を返そうと頑張っています！とガイドのチョウハンさん。日本が太平洋戦争に敗れ、インドがイギリスから独立した頃、日本よりインドの方が豊かだった。インドから上野動物園に象の花子が贈られた時、敗戦に打ちひしがれた日本国民は歓喜した。経済力は逆転したが、その経済力をインドのために役立てて貰う、お互いがハッピーになれる時節が到来したのだ。そのためには、新幹線や地下鉄、高速道路などのスペックをどうするか？思考を変え、遅まきながら巻き返しを計るが、電化製品などは高品質で高価な日本で売れ筋の高級品をそのままインド市場に投入して売れずに失敗。インドの生活に即したインド仕様の安価な製品を投入した韓国製に圧倒された。新幹線のスペックもどうするか？

最新の新幹線に搭載されたウォシュレットなどトイレシステム、インドの新幹線にも最新のものを搭載するのか？シベリア鉄道や中国はチベットの最新式天空列車ではトイレは落として放し、手洗いの水はよく流れず平置き of 便器は水浸し、酷い思いをしたが、垂れ流しの「黄害」新幹線という訳にいかないだろう。ただタンクに貯めるか？水洗にするか？その上でウォシュレットまでつけるか？快適なトイレを目指せば水の使用量が増え、タンクの増設、車両の重量増、軌道の高スペック化、水道料金、電気料金の果てまで影響する。思案のしどころか？インドの長距離列車は日本以上に複数のグレードに分かれている。グレードを分けて仕様と料金に差をつけ、全体の売上増でコストを回収するのも手かも知れない。もっとも右手でご飯を食べ、左手でお尻を拭くインドではバケツから柄杓で汲んだ水でお尻を洗う段階から、空港やホテル、レストランの、トイレの脇に付いた長い水栓をお尻に当てて洗い流す手動式ウォシュレットまで普及している。新幹線ウォシュレットは意外と受け入れられるかも知れない。

仲間と話していたら、インドの10%の金持だけでも1億人以上いる。アーメダバードのあるグジャラート州は金持が多い、ムンバイで商売しているのもグジャラート出身が多い、新幹線は最新式がいい。それより45度の高温という酷暑の自然条件に新幹線の機器、システムが耐えられるかが問題だとガイドのチョーハンさん。併せて、会話だけでなく、読み書き出来る日本語通訳としての売り込みを頼まれる。(続く)

◎「迎賓館の歴史と現在」・東大三鷹クラブ第136回定例懇談会のご案内

平成30年の三鷹クラブ定例会の幕明けは、1月30日(火)、迎賓館長の別府充彦さんをお招きして「迎賓館の歴史と現在」について講演していただきます。現役の国家公務員に出いただくのは、第79回の小牧和雄国土地理院長以来、ほぼ10年ぶりです。

日曜の昼、私が好んでチャンネルを廻すのは、BS朝日の「百年名家」という番組です。つい最近、赤坂の迎賓館が2回にわたって放映され、コメンテーター達とともに別府館長が出演しておられました。名前に記憶がありましたので、手元の寮友名簿を検索したところ、昭和54年入寮者の中に別府さんの名が載っていました。寮友ならば、定例会講師をお願いしようと、迎賓館に電話しました。残念ながら、別府さんは、三鷹に入寮を申込んだものの入居せず、結局大学時代を通じて下宿生活を送ったとのことでした。それでも、迎賓館についてお話いただく件は、快く引受けて下さいました。館長就任の直前、内閣府で広報室長を務められ、迎賓館自体のPRについてもいろいろ心を砕いておられたことも、私達には幸いしたと考えています。

迎賓館の建物に関し、私には忘れ難い思い出があります。公務員として駆け出しだった昭和34年、当時今の迎賓館内にあった内閣法制局に、先輩とともにしばしば通いました。大詰の段階では、法案審査が深更に及び、翌日までに修正部分を盛込んだ全条文を複数用意しなければならず、末席の私が徹夜でガリ版を切り、印刷して資料を作成したことが何回かあったからです。テレビ画面に、当時と様変わりした迎賓館の内部が映し出され、深い感慨を覚えました。

内装等の大改修を経て、迎賓館として再出発したのが昭和49年、以来、半世紀近く、日本の首脳外交の主要舞台として活用されて来ました。日本で開催された最初のサミットの会場となったほか重要な首脳会談が開催され、各国の王室関係者や元首などのVIPに対

する接遇の場となって来ています。

迎賓館では、以上のように、多くの賓客を世界各国からお迎えするとともに、観光立国の各地から、一般の方への通年の公開などにも本格的に取り組まれていると聞いております。おもてなしの行事の裏方として支える業務に加えて、新たな役割に挑む総責任者としての別府館長の御苦勞も並大抵のものではないと想像します。

今回は、館長としての1年半の経験を背景に、迎賓館の歴史的・文化的な価値や、最近の接遇の状況、そして参観の見どころまで、余人を以って代え難い貴重なお話を伺えるものと期待しております。 (平賀 記)

日 時 : 平成30年1月30日(火) 18時30分~21時

場 所 : 学士会館本館302号室(千代田区神田錦町3-28 TEL 03-3292-5931)

会 費 : 6000円(会場費、夕食代・飲み物代、通信費など込み)、別途二次会

申込先 : 干場 FAX: 03-5689-8192、Email: tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

◎虎ノ門茶寮

11月18日(土)の夕方、個室会席北大路の虎ノ門茶寮で寮生と、ちょっと贅沢な交流会。無断欠席寮生1名、総勢23名、OBが5人、留学生が6人、飲み放題付5千円の格安豚しゃぶコース。多世代、国際で盛り上がる。シニアのOBが多目に出してくれたので、🐟持ち出しは半分ほど。

参加者は、陳韋中(2015・数理科学研究科(D1)・台湾・台湾大学)、張喩(2015(院)・建築・中国・武漢大学)、北條新之介(2015(院)・総合文化研究科地域文化研究専攻アジア科中国・栃木・真岡→東北大)、園田夢之介(2015・文Ⅲ 教養学部国際科学科・北海道・北海道帯広柏葉)、登阪亮哉(2015・文Ⅱ 教育学部・京都・灘(兵庫))、青山絵里香(2016・文Ⅲ 文学部東洋史学・愛知・一宮)、片岡丈人(2016・文Ⅱ 経済学部・青森・弘前)、竹内碧(2016・理Ⅱ 薬学部・高知・高知学芸)、檜枝悠太(2016・理Ⅰ・兵庫・東大寺学園(奈良))、関澤昊(2017(院)・数理科学研究科・中国・武漢大学)、遠藤菜々子(2017・文Ⅲ・静岡・浜松西)、丁婧文(2017・理Ⅱ・中国・曉星国際(千葉))、原田龍之介(2017・理Ⅰ・愛知・東海)、藤川剛司(2017・理Ⅰ・静岡・浜松西)、星山成龍(2017・文Ⅱ・兵庫・姫路西)、ラーリック寿里晏(2017・理Ⅱ・茨城・水城)、脇山由基(2017・理Ⅱ・佐賀・唐津東)、OB 田中克幸(2003・理Ⅱ 農学部応用生命科学科・福岡・東筑)、永田達哉(2004・理Ⅰ 理学部数学科・静岡・浜松北)、平賀俊之(1951・文Ⅰ・北海道・稚内)、辰紘(1965・文Ⅰ 教養学部教養学科国際関係論・大阪・三国丘)、干場革治(1966・文Ⅰ・秋田・能代)、勝部日出男(1968・文Ⅰ 法学部・鳥取・米子東)。

◎一緒にスキーしませんか？(結びに代えて)

今年も水上の奥の宝台樹スキー場に華麗な？シュプールを描けたらと思います。🐟のエスティマ四駆で8時半頃首都高に乗り、昼前に宝台樹スキー場脇の蕎麦屋の駐車場に車を入れ、もつ煮と山菜、お新香で軽く一杯。鴨セイロで締め、半日滑って帰ります。交通費(ガスと高速)、飲食代は割り勘、半日リフト券は各自負担。3月下旬までの毎週土曜日、仲間がいれば🐟同様のポンコツですが、愛車を走らせます。スピードとスリル、ダイナミズムを楽しみ、白銀の自然に包まれ体を動かしたい方はご連絡願います。再見！